

公益社団法人日本心理学会研究集会等助成金 成果報告書

代表者氏名	内田 勝也	所属	情報セキュリティ大学院大学 名誉教授
研究会等名称	情報セキュリティ心理学研究会		
成果概要	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 9名 (うち認定心理士 1名) 非会員 8名 (うち認定心理士 0名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>(1) 月例会 (2019.04～2020.01) 今年度は、9回の月例会を実施した。 「2019年度各回概要.pdf」に各回の概要を記した。 今後も継続的に行う予定</p> <p>(2) ワークショップ (2020.03.13・14) の中止</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 国 (NISC: 内閣官房セキュリティセンター) の「サイバーセキュリティ月間行事」に合わせ、3月13日 (金) ～14日 (土) 9:55～17:00 にワークショップを予定していたが、新型インフルエンザの影響でやむなく中止した。 来年度もサイバーセキュリティ月間にあわせ、2日間のワークショップを計画する。 ● 今年は、貴学会及び総務省からの後援を頂き、また、内閣官房セキュリティセンターの後援も予定しており、多くの参加を予定していたが、残念であった。 ● なお、来年度はリモート (テレビ会議) でも研究会に参加できる仕組み (集合研究会への参加とリモート (大学・企業・自宅等) での参加の可能性を試行したい。 <p>(3) 今年度は、日本心理学会 大会での報告を行えなかったが、来年度は予定したい。</p>		

情報セキュリティ心理学研究会
《 2019 年度 月例会概要 》

1. セキュリティ会議・展示から見たセキュリティ心理学
～ RSA 2019 & InfoSec World 2019 ～

日 時 2019 年 4 月 26 日

報告者 内田 勝也

概 要 1980 年代初めに、米国で開催されていた「コンピュータの国際会議・展示」に始めて参加した話を、帰国後、かつての上司に話をしたが、『行かないより、行った方が良いけど、一度行って、それも展示だけみて、コンピュータ業界の流れを分かったように思うな。毎年、同じ国際会議・展示に参加し、基調講演やセッションの内容を聞いて始めて、その業界の流れが分かるもの』と指摘された。

しかし、セキュリティをやっけいこうと考えたが、1990 年代初めまで その機会がなかったが、それ以降、毎年参加する努力をしてきた。勿論、途中で消滅してしまったものもあった・・・

今年 (2019 年) は、3 月にサンフランシスコで「RSA 2019」が、4 月にオランダで「InfoSec World 2019」が開催された。両方とも 5 年以上継続して参加してきたが、今年は何か「セキュリティの流れ」が変化するきっかけになる年ではないかと感じた。

勝手な思い込みなのか分からないが、参加して感じたこと等を含め報告をします。

2. 面倒な事柄をどの様に依頼するのか ～ 人間の脆弱性を利用した試み ～

日 時 2019 年 5 月 24 日

報告者 内田 勝也

概 要 米国の社会心理学者 ロバート・チャルディーニは、人間には「6 つの脆弱性」があると述べている。

この中の 1 つに、【フット・イン・ザ・ドア テクニック：最初に誰もが断らないようなごく軽い依頼を行ってもらい、次により面倒なものの依頼をして、その承諾を得る方法】がある。

この考えに基づけば、直接的な依頼では断られる可能性のある事柄をうまく依頼できると考え、その可能性を調べた。

前回説明した「ナッジ (Nudge)」の考え方にも通じるものがあるのではないかと考えている。

3. 質問紙調査から何を引き出すか：心理尺度作成を中心とした質問項目・回答方法の工夫について

日 時 2019 年 6 月 21 日

報告者 上田 卓司

情報セキュリティ心理学研究会
《 2019 年度 月例会概要 》

概要 『ユーザや利用者あるいはセミナー等の受講者の行動・判断傾向を探る手段としてアンケート調査が多く利用されがちである。しかしアンケート調査の回答から適切な情報を引き出すためには、多くの留意点や工夫が必要である。本発表では、主に心理尺度作成や社会調査場面における、質問紙調査の構成方法や回答バイアスに関する研究を紹介しつつ、適切かつ妥当性の高いアンケートを実施し、データを解釈する際に求められるポイントをまとめる。』と 3 月のワークショップで報告をしました。今回は、

- 1) 3 月のワークショップの Quick Summary
- 2) 評定データの解釈
- 3) 情報セキュリティ分野におけるアンケート（質問）調査での効果的な質問方法について：演習を予定しています。

4. ソーシャルエンジニアリングの考察 ～ 全体概要から、ソーシャルエンジニアリングを理解しよう ～

日時 2019 年 7 月 26 日

報告者 内田 勝也

概要 サイバーセキュリティ分野では、『ソーシャルエンジニアリング』と言うと、攻撃者が利用する欺術と考えられるが、実際には深く、広い定義を考える必要があるのではないかと考えています。

ソーシャルエンジニアリングの利用世界（ネット、実社会）や利用者（攻撃者、被害者、その他）、手法（なりすまし、サイト侵入、その他）等を考えてみたい。

攻撃者の利用に対し、『敵を知り、己を知る』ことで、攻撃防御に利用する等、多くの事柄が考えられる。

5. サイバーセキュリティはナショナルセキュリティ ～ 何を考え・検討し、報告書に纏めたのか ～

日時 2019 年 9 月 27 日

報告者 内田 勝也

概要 今回は、セキュリティ心理学から少し離れ、サイバーセキュリティをナショナルセキュリティとして考える必要があるとの観点から纏めた報告書の話です。2019 年 3 月までの約 2 年間、「サイバーセキュリティにおけるナショナルセキュリティの検討」を行ってきた

2000 年頃から感じていたのは、「National Security」を「国家安全保障」と訳され、多くの人は、国、国土の保全と考えているようだが、国土にいる人達の保護も、「National Security」の大事な面ではないかと考えていた。辞書には、「national」の意味に、国民の意味（「A citizen of a particular

情報セキュリティ心理学研究会
《 2019 年度 月例会概要 》

country.」)がある。このような考えが次第に膨らんでいたが、もう1つ大きな課題は、WTO 政府調達であった

一部の官庁・自治体職員は、WTO 政府調達を考えると、広く海外にも調達を公開する必要があるとの指摘があったが、WTO には例外規定があるが、従来あまり適用されなかったが、米国大統領の出現で、国内でも風向きが変わってきた本研究は、2017 年前半に GLOCOM での募集があり、唯一の外部人材による検討分科会が2年間限定で実施された

2019 年 7 月 1 日に公開した報告書作成経緯を含めた内容の報告です

6. セキュリティ心理学 『情報収集』を考える

日 時 2019 年 10 月 23 日

報告者 内田 勝也

概 要 「孫子」の兵法書では、『敵を知り、己を知れば、百戦危うからず』とあるが、敵や自分の何をどの様に知るのだろうか？ セキュリティ心理学の観点から考えてみたい

敵（攻撃者）は、攻撃対象の特性を知り、攻撃を仕掛けるが、攻撃対象がコンピュータやネットワーク、人間などを考える必要がある。例えば、システムの脆弱性（設定ミス、パッチ未適用など）を攻撃される可能性がある。更に、SNS や人的接触（面談、通りすがり等）により、情報収集し、それを利用して攻撃を行う

防御側は、攻撃者の手段を知り、可能な限り、事前に対応を考えることが、被害を小さくすることが可能になる

今回は、情報収集について考えてみる。

7. セキュリティ心理学 『情報収集』を考える（その2）

日 時 2019 年 11 月 22 日

報告者 内田 勝也

概 要 前回は、ソーシャルエンジニアリング的要素の情報収集を考えてみた。しかし、これ以外の情報収集等も考えられ、今回は、その辺りを検討してみたい。

【内定辞退率予測】や SNS での大量個人情報収集などが問題になるが、パソコンやスマホ利用者が増えているが、利用者の多くは情報セキュリティ・リテラシーが必ずしも高くない。個人情報ツール等を使って収集する方法は、ソーシャルエンジニアリングでは必須であり、複数に分散している情報を集約し、目的を達成する方法もある。長期的に狙いを定めた情報収集・攻撃方法：APT (Advanced Persistent Threat) も盛んに行われている。

今回は、前回の補足や情報収集ツールなどを含めて考えたい。

8. セキュリティ心理学における行動科学等を考える ～ セキュリティ心理学で Nudge 等の活用について ～

日 時 2019 年 12 月 20 日

報告者 内田 勝也

概 要 国内外で「ナッジ (NUDGE)」に関連した論文が発表されているが、サイバーセキュリティ分野への適用事例はまだ少ない。ナッジは、2017 年にノーベル経済学賞を受賞したリチャード・セイラー教授が打ち出した考えで、オランダのスキポール空港の小便器に「ハエ」が描き、それをめがけて行う人が増えたため、清掃費が 8 割減少したと言われている。

標的型攻撃訓練では、数%から 10 数%程度のクリック率になっている。このため、サイバーセキュリティでは、標的型攻撃やセキュリティパッチに求められるのは、100%、あるいは、それに近いことが望まれるが、空港での 8 割程度では十分とは言えない。

ナッジ等の基本的な考え方及び、クリック率等をどの様に削減していくかをナッジ等の行動経済学/行動心理学や社会心理学などの知見を利用した考え方について検証を試みたい

9. The Day before and after... in Security Psychology ～ セキュリティ心理学、来し方、行く末 ～

日 時 2020 年 1 月 20 日

報告者 内田 勝也

概 要 1993 年、始めてセキュリティ会議 (CSI: Computer Security Institute) に参加して感じたのは、暗号、コンピュータ、ネットワーク技術だけでなく、マネジメントや法制度などのセッションがありました。更に、裁判中のリモートアクセスを利用した犯罪についての話題も語られていました。国内では、技術中心であり、その他は話題は殆どありませんでした。

また、翌 1994 年には、「Meet the Enemy」という Night Session で長距離電話会社のオペレータがテレコンファレンスの反対側にいたハッカーから、ID/PW を聞き出されるという衝撃的な事柄もあり、翌年 11 月に「シークレット・オブ・スーパーハッカー (Secrets of a Super Hacker)」も翻訳されましたが、「知らぬは・・・ばかりなり」的考えでした。1996 年には、米国 RAND が机上訓練を行い、「The Day after in...Cyberspace」に纏めました。2000 年 1 月に、NHK 特集「世紀を越えて： 電脳社会 闇の侵入者 (ハッカー)」が放映されましたが、このシミュレーションを動画にして、放映しました。少し後に「Human Firewall」をこの報告書にもあり、CSI でも特別なワークショップを

情報セキュリティ心理学研究会
《 2019 年度 月例会概要 》

行っていました。

今年は、RSA Conference 2020 と RSA Conference 2020 Asia Pacific & Japan は、共に Conference テーマを「Human Element」としています。セキュリティ心理学研究会は、2008 年 9 月に開催された日本心理学会でのパネル展示から始まりました。コンピュータ／セキュリティと心理学研究者の学際的研究会から始まりました。

今回は、セキュリティ心理学の過去・現在・未来を考えてみます。

(様式5)

2020年3月16日

日本心理学会研究会 2019年度会計報告書

研究会名称 情報セキュリティ心理学研究会

研究会番号 16010

助成金額 ¥30,000

年月日	項目	金額
2019.04.26	印刷代(配布資料) 13頁 x 28名 x 10円	3,640
2019.05.24	印刷代(配布資料) 8頁 x 20名 x 10円	1,600
2019.06.21	印刷代(配布資料) 9頁 x 24名 x 10円	2,160
2019.07.26	印刷代(配布資料) 15頁 x 29名 x 10円	4,350
2019.09.27	印刷代(配布資料) 24頁 x 29名 x 10円	6,960
2019.10.23	印刷代(配布資料) 17頁 x 22名 x 10円	3,740
2019.11.22	印刷代(配布資料) 14頁 x 19名 x 10円	2,660
2019.12.20	印刷代(配布資料) 22頁 x 30名 x 10円	6,600
2020.01.20	印刷代(配布資料) 22頁 x 17名 x 10円	3,740
2020.03.16	研究会 負担金	-5,450
	支出合計	30,000